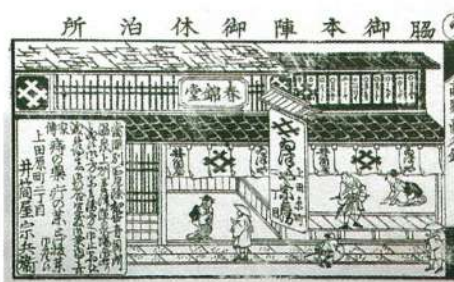


行くも帰るも123里

～ 前田土佐守家当主 江戸への旅 ～

開催期間: 令和6年4月27日(土)～7月7日(日)



まえだ と さのかみ とまりふだ
前田土佐守泊札(左)

(個人蔵、72.1×22.8cm)

はたご ず
と旅籠の図(上)

ふつこく しょこく どうちゅうあきんど かがみ なか せん どう ぜん こう じ の お ぜん
(『複製 諸国道中商人鑑 中仙道・善光寺之部 全』より)

北国下街道の宿場に数えられる上田宿(信濃、長野県)で旅籠を営んでいた家に伝わる泊札である。泊札は宿札、関札とも言い、大名・旗本などが宿泊する本陣や脇本陣の門または宿の出入り口に、宿泊者の名を書いて掲げた。宿泊者の位が高くなれば札も大きく、掲げる数も多くなる傾向があり、「幕府年中行事」には高さ三尺五、六寸(110cm弱)、幅一尺(約30cm)ほどであると記されている。これに比べると前田土佐守の札は小さめだが、泊札が用意されていたことから、一般の藩士ではなく、知行高(1万1千石)に相応した扱いを受けていたことがうかがえる。加えて、各街道の宿場を紹介した「諸国道中商人鑑」(文政10年(1827)頃出版)には、この泊札が掲げられていた、すなわち前田土佐守家当主が宿泊した旅籠(井筒屋宗兵衛)を確認することができる。前田土佐守家当主がたどった江戸までの街道の様子を、直に感じさせる資料である。

開催にあたって

江戸時代、参勤交代によって、藩主が江戸と国許とを行き来していたことはよく知られています。特に加賀藩は徳川御三家に並ぶ有力藩で、その規模の大きさは随一と伝えられます。しかし、参勤交代の他にも、藩士たちはしばしば出府(江戸へ行くこと)の御用を命じられ、金沢からの長い道のりを往復していました。その距離は約百二十三里、現代の単位で四百八十三kmにも及びます。

本展では、前田土佐守家当主を中心に、加賀藩の上級武士が江戸へ行くまで、そして金沢へ帰るまでの道のりに注目します。加賀藩士たちは、藩主に出府を命じられてから、どのような準備をし、どのような道のりを経て、江戸へたどりついたのでしょうか。また当館には、前田土佐守家当主が金沢へ帰ってくる際の「道中日記」が所蔵されています。江戸での御用を終えた藩士は、どのような思いで金沢への帰路を進んだのでしょうか。

奇しくも、今年の三月十六日には北陸新幹線が敦賀駅まで延伸・開通し、北陸・東京間の往来は一層便利になりました。本展を機会に、昔の人々がたどった道のりに思いをはせ、その違いを楽しんでいただければ幸いです。

